

五輪書による間と間合の研究 The Study on "Ma (timing)" and "Maai"(space) in the Book "Gorinsyo"

塩入 俊次

Shunji SHIOIRI

はじめに、剣道には間・間合とゆう言葉が盛んに使われるが、この言葉の意味は広く、深くうまく表現することが難しい。武蔵の五輪書の中にはこれらを取り上げて剣の道ばかりでなく人生における様々な教訓を与えている。これらを現代の剣の道・学生生活・人生について私なりに考察してみた。

間について大辞林では次のように述べている。

I空間的な間隔 物と物とのあいだの空間 すきま
少しあけて座布団を敷く 家屋内の一区切り ある
物の位置する空間を漠然とさす語 あたり 山と山
のあいだいざよう雲は 建物の柱と柱のあいだ

II時間的な間隔 ひま 出発までまだ時間がある ま
もなく電車が来る ことが継続している間の時間
ある状態が継続している間の時間〔休むまがない
知らぬ間に行われる〕

III日本の伝統芸能〔音楽 舞 踊 演劇〕などで拍と
拍〔動作と動作〕のあいだの時間的な間隔 転じて、
リズムやテンポの意味にも用いられる〔間の取り
方が上手い〕〔間を外す〕

IV適当な時機 機会 潮時〔うかがう〕〔を見計らう〕
その場の具合 雰囲気〔の悪い思いをする がいい
運が善い 都合がいい〕が抜ける 拍子が抜ける 当
てがはずれてぼんやりする〔間の抜けた返事〕大
事な点が落ちる おろかにみえる〔間の抜けた顔〕
が持てない する事がなくて時間を持て余す 人との
会話が途切れて、気まずい時間が出来る 間が悪い
きまりが悪い 運が悪い 折りが悪い時に客が来る

間をあわせる 拍子が合うようにする 適当に処理
してその場をしのご

間を置く 間隔をあける 時間を隔てる

間をかく 役に立たない 用が足りずに迷惑を掛ける
主人えの勤めの間をかく

間を持たず 会話や台詞のとぎれた時間をうまくつ

ないで取りつくろう

あいた時間を何かしてつぶす

間合 物と物との隔たり〔適当に間合を詰める〕

動作をするのに適当な時機 頃合い あいま

間合については簡単であるが、井上正孝が人生に
生きる五輪の書の中で間と間合について次のよう
に書いている。間と間合は厳密に言えば異なる内
容であるが、間合を略して間と言うこともあり、
間と間合を混同している人もいる。分かり易く言
えば、間は時間の中で〔時の間〕〔時の刻み〕であ
る。言うならばタイムの進行形でタイミングである。
要約すれば〔時間的距離〕のことである。

剣道の間では、この時間的な間と距離的な間が同
時に重なり合って相手を打つ好機を作り出すため
に、日夜稽古をするのであるがその中に人との出
会い 別れ やり取りが生まれる。現在の剣道は人
を殺す目的ではなく人を活かし己を活かすための
修業の道であると考え。従って私のような保健
体育の教官は、心身の正常な発育発達を願うとと
もに社会秩序に法った人間関係が出来る事を望む
ものである。

原著 宮本武蔵 訳者 神子規 発行所 経営思潮
研究会の五輪の書の中ではP20〔Pはページ〕吉
岡清十郎との試合、武蔵はわざと時刻に遅れて相
手を苛立たせ、木刀で一撃にした。吉岡家との第
三戦は、清十郎の子又七郎を擁した門人数十人場
所は洛東の一乗寺村下がり松、その日武蔵はまだ
薄暗いうちに先行して身を潜め、再び遅れてくる
だろうと見込んでいた敵の裏をかいて急に姿を現
すや一刀のもとに少年又七郎を切り捨てた。

P23 この時小次郎は猩々緋の陣羽織に染革の裁付
袴を着け、草履をはき、備前長光の三尺余りの太
刀をさしていたが、武蔵を見るや波打ち際にたっ
て憤然といった。〔なぜ遅れた。臆したか〕武蔵は
黙然して答えない、小次郎はいよいよ怒り、刀を

抜いてさやを海に投げ相手の近づくのを待つ。武蔵は微笑していった。〔小次郎敗れたり。勝つ者がなぜ鞘を捨てるのか〕

これは武蔵の良く使う長い間である。人によっては武蔵は度々この様な間を取るので卑怯であるとも言いが生死を分けた戦いの場、大いに考えさせられる間である。ビジネスの場や約束では許されない事で、約束の10分前が常識である。ましてや女性を待たせるのは論外である。

P51 二刀と伝出す所、武士は将卒ともにぢきに二刀を腰に付ける役也。昔は太刀刀といい、今は刀脇差しという。武士たるもののこの両腰を持つ事、こまかに書頭に及ばず。道具を役に立てず、腰に収めて死する事、本意にあるべからず。

武士は、必ず二刀をもち生死を賭けた戦いに臨むべきである。稽古の中で竹刀が壊れて稽古が途切れることなく速やかに竹刀袋から予備の竹刀を出して稽古を続けたいものである。

P59 脇差しは座のせばきところ、敵の身際によりてその利おほし。太刀はいずれの所にも大形出合利あり。長刀は戦場にては槍に劣る心あり。長刀は後手なり。同じくらの学びにしては、槍は少し強し。槍長刀も事により、詰まりたる所にてはその利少なし。

戦う場所、状況に応じて長い物短い物を使い分ける間合大切である。私が初めて長刀と対戦したとき、練習で剣道は七段だが長刀は初めての人に手も足も出ず、本格的に長刀をやる四段の女性との戦いの負けを覚悟せざるをえなかった。案の定開始早々ふだん打たれた事のない脛を打たれた、しかし二本目で鏑迫り合いになりそこから咄嗟に相手の脛を切返したところ、そんな所を打たれるとも思わなかった相手が慌てて下がったので面を打って二本目を取り調子に乗って勝った事がある。同じくらの学びでは長い物が有利であるを教えられた。

P60 城郭の内にしては鉄砲にしく事なし。野相などにも、合戦のはじまらぬうちは、その利多し。戦いはじまりては不足なるべし。弓の一つの徳は、放つ矢人にみえてよし。鉄砲の玉は目にみえざる所不足なり。

このころの鉄砲はまだ戦術が確立されてなく使い勝手が悪かったようである。弓の矢が見える所がよいは面白い。

P62 兵法の拍子の事

物事につき、拍子はあるものなれど、とりわけ兵法の拍子、鍛練なくては及びがたき所なり。

世の中の拍子あらわれてある事、乱舞の道、伶人管絃の拍子など、これみな良くあう所のろくなる拍子也。

武芸の道にわたって、弓を射、鉄砲を放、馬に乗る事なども、拍子調子はある。諸芸諸能に至りても、拍子を背く事はあるべからず。

又空なる事においても拍子はある。武士の身の上にして、奉公に身をしあぐる拍子、しさぐる拍子、筈のあふ拍子、筈のちがふ拍子あり。或るいは商いの道、分限になる拍子、分限にもそのたゆる拍子、道々に付けて拍子の相違ある事なり。物毎のさかゆる拍子、おとろふる拍子、能々分別すべし。

兵法の拍子において様々ある事なり。先ある拍子を知って、ちがふ拍子をわきまへ、大小遅速の拍子の中にも、あたる拍子を知り、背く拍子を知る事、兵法の専也。これ背く拍子わきま得ずしては、兵法確かならざる事なり。

兵法の戦いに、その敵敵の拍子を知り、敵のおもひよらざる拍子をもって、空の拍子を知恵の拍子より発して勝所なり。

いずれの巻きにも拍子の事を専書記也。その書付の吟味をして、能々鍛練有るべき物なり。

いよいよ本題に入る、物事にはすべて拍子があるが、とりわけ兵法の拍子は鍛練がなくては身につかない物である。命のやり取りの中で間違いは許されない。皆が認めている拍子には、舞踏、雅楽の演奏などがあり、拍子があれば素晴らしい物になる。武芸の道の、弓を射る呼吸、鉄砲を撃つタイミング、馬の乗りかたすべて拍子がありしっかり鍛練してその拍子をつかまなければならない。われわれの身の振り方にも調子良く仕事が出来トントン拍子で出世する事もあるし、自分では一生懸命やっているのに時流に乗れずに成功できないなど、自分に合う拍子、合わない拍子があるのでしっかり見定めなければならない。武蔵ですらこの問題では必ずしも上手く拍子を取れないで目的を達成できなかった。しかし時流に乗れなくても努力をしなければ何も生まれない。その道々にそれぞれの拍子があるので合う拍子を見定める目を磨く事が大切である。

兵法の拍子も様々で、発展する拍子、先細りの拍子を知り、強弱遅速の拍子の中で自分に合う拍子あわない拍子を激しく数多くの練習の中から自分で見つける事である。

敵を知り己を知りて百戦危うからず。

私の学生との間も、以前に比べると随分と時間的にも距離的にもあくようになった。若いころ短気で物事をすべて即決しなければ気が済まなかった時機、合宿の時も以前は24時間学生と離れないでいられたが今は適当に距離を置いている。学生指導も間が置けるようになった。これは指導する方もされる方も冷静になれないときには大切な事で一週間ほど時間を置いて話をすると素直にごめんなさいが出たり、早くこの学生いなくなればと思うほどあわない学生が、しばらくして結婚しますので挨拶をして欲しいなどといわれるとなぜ・・・と、電話して聞いてみると社会に出て何か有ると先生が出てくるのでどうしても会いたくて・・・長い間が必要な事が時としてあるものだ。

又間が悪くいつも私と出くわすと何か言われる学生が、先生はどうして何時も会うと文句ばかり言うのだと・・・おまえは私と会うときいつも文句を言われるような事ばかりしている、私としても時には誉めたり趣味の話をしたりしたいのにと云った事が有る。この学生とは学年が上がるにつれて話が通じるようになった。

P75 兵法の心得の事 兵法の道において、心を広く直にして、きつく引っ張らず、少しもたまるす、心の偏らずように、心を真ん中に置いて、心を静かにゆるがせて、そのゆるぎの刹那も、ゆるぎやまぬように、能々吟味すべし。

この事は総ての事において大切な事で、常にリラックスしながら気を抜かず、一つの事にとらわれず、瞬時に物事に正しい反応が出来るようになる事である。なれない動作、緩慢な動き、誤動作これらは筋肉と心のリラクゼーションが出来ないからである。練習や鍛練で意のままに正確な行動が取れるように成りたい物である。

P86五方の構の事

五方のかまへは、上段、中段、下段、右の脇にかまゆること、左の脇にかまゆること、是五方也。構五つに分かつといえども、みな人を切らんが為なり。構五つより外はなし。

いずれのかまへなりとも、かまゆるとおもはず、

きる事なりとおもふべし。

構の大小は事により利にしたがふべし。上中下は体の構なり。両脇はゆふの構なり。右左の構、上のつまりて、脇一方つまりたる所などにての構なり。右左は所によりて分別あり。

この道の大事にいわく、構の極まりは中段と心得べし。中段、構の本意なり。兵法大きにしてみよ。中段は大將の座なり。大將につきあと四段の構なり。

間とは直接関係はないが、剣道の場合構方により随分間合が違って来る物である。しかしここでは構には五つの構がありそれぞれを時と場所の応じて上手に使い分ける事の大切さをいっている。学生に接するときも同じで、時には強く、時には甘く、いろいろな接し方が有る。上手に使いたいものである。いつも背筋を伸ばし大らかに構えたいものである。

P95 有構無構のおしへの事

有構無構と云は、太刀をかまゆると云事あるべき事にあらず。されども五方に事あればかまへともなるべし。太刀は敵の縁により所により、けいきにしたがい、何れの方に置たりとも、その敵きりよきように持心なり。上段も時に随い少し下がる心なれば中段となり、中段を利により少し上ぐれば上段となる。下段もおりにふれ少し上ぐれば中段となる。両脇の構もくらいにより少中へ出せば、中段下段ともなる心也。

然によって、構はありて構はなきと伝利也。先太刀をとっては、いづれにしてなりとも、敵をきると伝心也。若敵のきる太刀を受ける、はる、あたる、ねばる、さわるなど伝事あれども、みな敵をきる縁なり。心得べし。うくと思ひ、ねばるとおもひ、さわるとおもふによって、きる事不足なるべし。何事もきる縁と思ふ事肝要也。

剣道の授業で私がうるさく伝は、この事で基本はしっかり覚えてその上で相手を打ちやすい自分独特の構え拍子をとる工夫をする事が大切であるが、構がなんであるかも解らないうちに勝手にやりだしては何も生まれては来ないのである。

物事に是が総べて、是でなくてはならないと伝事はない。それぞれが工夫して自分のベストのものをを見つけ出す事が大切である。

P99敵を打に一拍子の事

敵を打拍子に、一拍子といひて、敵我あたるほ

どのくらいを得て、敵のわきまへぬうちを心に得て、我身をもうごかさず、心も付ず、いかにもはやく直に打拍子也。敵の太刀、ひかん、はづさん、うたんと思心のなきうちを打拍子、是一拍子也。この拍子よくならひ得て、間の拍子をはやく打事鍛練すべし。

この拍子は互いに打ち間に入った瞬間、相手が何をしようか判断出来ぬ間に、何の心の迷いもなく素早く打つ拍子を伝う。是は、かなりの技術的な鍛練と心の修行があってなされる技である。正しい事を迷わず即断即決してゆける事が出来れば素晴らしい。

P100 二の腰の拍子

二のこしの拍子、我打ちださんとする時、敵はやく引、はやくはりのりくるような時は、我打と見せて、敵のはりてたるむ所を打、是二のこしの打也。この書付計にては中々打得がたかるべし。おしへうけては、忽ち合点のゆく所也。

お互いに競って緊張した状態のとき、打つと見せて〔フェイントかけて〕相手がその動作に惑わされて緊張しすきの出来た所を打つ、又は本当に相手を打ちにゆくが、一瞬相手が打ちを避けて、又は受けて緊張して動きが途切れる所をすかさず打つ拍子の事である。常に心を静かにゆるゆるとゆるがせて、少しも止まる事無い心でいられればこの様な技にも対処出来る。この様な気持ちでいられたら人生素晴らしいであろう。

P101 無念無想の打と伝事

敵も打ださんとし、我も打ちださんと思ふ時、身も打身になり、心もうつ心になって、手はいつとなく空より後ばやにつよく打事、は無念無想とて、一大事の打也。このうちたびたび出合打也。

対の先の状態で身も心も打つ体勢で集中しながらも体は緊張せず、リラックスした状態で自然に早く強く打つ事である。是を無念無想と伝最も大切な打でありしばしば出合う事があると武蔵は伝が是がしばしばあると伝事はよくよく武蔵が鍛練したが故である。おいそれとその心境になる事は難しい事だ。

P102 流水の打伝事

流水の打といひて、敵相になりてせりあう時、敵はやくひかん、はやくはづさん、はやく太刀をはりのけんとする時、我身も心も大きくなって、太刀を我が身の後よりいかほどもゆるゆると、よ

どみのあるように大きに強く打事也。この打ちならい得ては、たしかに打よきもの也。敵の位を見わくる事肝要也。

この技はいつもの早いテンポの打ちでなく相手のタイミングを外して打つ事である。野球の速球とスローカーブの投げ分けのようなものである。しかしこれは充分に相手を知り尽くしてやらないととんでもない事になる事があるので気を付けなければあならない。

P103 縁のあたりと伝事

我打出す時、敵打とめん、はりのけんとする時、我打一つにして、あたまも打、手をも打、足をも打つ。太刀の道一つをもって、いずれなりとも打所、是縁の打也。この打能々打ならひ、何時も出合打也。細々打あいて分別あるべき事也。

この縁のあたりは現在の剣道においては、気持ちの上で相手を叩き潰すくらいに考える事が出来る。しかし競技では面、小手、胴、突でありこの様な打ちはない。

P104 石火のあたりと伝事

石火のあたりは、敵の太刀と我太刀と付合うほどにて、我太刀少しもあげずして、いかにもつよく打也。是は足もつよく、手もつよく、三所をもってはやく打べき也。この打ちたびたびならわずしては打がたし。よく鍛練すればつよくあたるもの也。

この打ちは、遠間の打ちではなく、近い間合での素早く激しい打ち方を言っている。間が近いので動作を小さくして、なをかつ効果的な打ちはこのように火打ち石を打つと同時に火花が出るのと同じほどの刹那の出来事である。実際の打ちでは足を強く踏み、前に出るのではなく、上に伸び上がるような形になる。

P106 太刀に変わる身と伝事

身と伝事、身にかはる太刀とも伝べし。惣じて敵を打身に、太刀も身も一度にはうたざるもの也。敵の打縁により、身をばさきへうつ身になり、太刀は身にかまわずうつ所也。若は身はゆるがず、太刀にてうつ事はあれども、大形は身を先へ打、太刀をあつより打もの也。能々吟味して打ならうべき也。

ここでは我々がよく手先で打つな、足で打て、腰で打てと言う事である。足腰が動いてから竹刀が動いて始めてしっかりした打突になるものである。

五輪書による間と合間の研究

P107 打とあたると伝事

打と伝事、あたると伝事、二つ也。打と伝心は、いずれの打にても、思いうけてたしかに打つ也。あたるはゆきあたるほどの心にて、何と強くあたり、忽ち敵の死るほどにても、是はあたる也。打つと伝は心得て打所也。吟味すべし。

敵の手にても足にてもあたると伝は、先あたる也。あたりて後をつよくうたんためなり。あたるはさわるほどの心、能くならい得ては格別の事也。工夫すべし。

ここでは、打つとあたるの違いをはっきりさせている。〔打つ〕と言うのは心に決めて確実に打つ事であり、〔あたる〕は、ただぶつかるの意味でしかない。つよくても弱くても関係ない。最後の二行で、敵の手なり足なりにあたるというのは、後で強く打つために、まずは触るほどの事である。人生において、成功するのはしっかり努力しての結果であり、運良く宝くじにあったのとは全く違うものである。

P109 しゅうこうのみと伝事

秋猴の身とは、手を出さぬ心なり。敵へ身入れるに、少も手を出す心なく、敵打前、身をはやく入心也。手を出さんと思へば、必身の遠のくものなるによって、惣身をはやくうつり入心也。手にてうけ合するほどの間には、身を入やすきもの也。能々吟味すべし。

虎穴に入らずんば虎子を得ず、遠間でぐずぐずしていても埒が明かない、相手の懐深く入り込んで身を寄せてしまう事により目的を叶える事が出来る。秋猴は手の短いサル的事。

P113 身のあたりと伝事

身のあたりは、敵のわきへ入りこみて、身にて敵にあたると伝心也。少し我顔をそばめ、我左の肩をだし、敵の胸にあたると伝事。あたると伝心、我身をいかほどもつよくなり、あたると伝心、いきあい拍子にて、はづむ心に入るべし。この入事入りならひ得ては、敵二間も三間もはげのくほどつよきもの也。敵死に入るほどもあたると伝心。能々鍛練あるべし。

切り合いでの体当たりを如何当たると効果的かと説明しているが、このように当たるとかなりの衝撃があるであろう。現在の剣道では、この様に肩を出して相手の胸に当たる事はほとんどなく、この様な当りは危険であると指導され、腰を入れて相手を下から上に突き上げるようにして体制

を崩しつぎの打ちを出すために使われている。

ページの都合で今回はここで止めておくが次回はさらに深く掘り下げたい。

参考文献	宮本武蔵	原著	五輪書
	井上正孝	著	人生に生きる 五輪の書
	松村明	編	大辞林

「受理年月日 1999年9月20日」